PRO MUSICA NIPPONIA

日本音楽集団

第134回◈定期演奏会
～真夏の夜へのプロローグ～

1994年7月5日㈫ 午後7時開演
バリオ・ホール

［主催］日本音楽集団
［制作協力］奈良音楽事務所
〒151 東京都渋谷区笹塚3-17-1 滝沢ビル302
TEL03-3378-4741 FAX03-3376-2033

プログラム

1. 双 魚 譜 (1986年)　　吉松　　隆 作曲

尺　　八＝三橋貴風
二十絃箏＝吉村七重

尺八と二十絃箏のための四つの古典的寓話抄。「双魚」は、魚座の正称「双魚宮」から、尺八と二十絃箏が並び対峙する様を二匹の魚に見たてての命名。
曲は序の魚、破の魚、緩の魚、急の魚の四つの部分より成る。
三橋貴風、吉村七重の委嘱により1986年７月に初演された。

2. カシオペア21 (1982年)　　三木　　稔 作曲

短二十絃箏＝島崎春美
　二十絃箏＝宮越圭子
主奏二十絃箏＝山田明美
　二十絃箏＝桜井智永
低二十絃箏＝久東寿子

天の北極に近く、銀河に浮かぶカシオペア座は、五つの星がW型に並び、北極星を見出す目印ともなる。高音部に細い絃をかけた短二十絃箏、合奏の基部に低音二十絃箏を配し、中に三面の通常の二十絃箏を持つ五重奏は、響きのバランスと輝きにおいて箏による合奏の最良のものを出し得よう。尚、この曲は主奏二十絃箏と他の四面との小協奏曲的な趣きもある。
野坂恵子二十絃箏エコールの委嘱によって1982年11月に初演された。

3. ブルートレイン (1979年)　　広瀬　量平 作曲
三橋　貴風 編曲

尺八Ⅰ＝竹井　誠・添川浩史
尺八Ⅱ＝藤崎重康・水川寿也
尺八Ⅲ＝三橋貴風・加藤秀和
尺八Ⅳ＝素川欣也(助演)・石田忠史

この曲は1979年の９月にフルート・オーケストラの為の委嘱作品として作曲されました。
曲は協和的で優雅なハーモニーに託して、夜行列車のいささか空想的な、またちょっぴりメランコリックなイメージをロンドの様な形で描いています。
原曲ではピッコロ、フルートⅠ・Ⅱ、アルト・フルート、バス・フルート各２パートの計10パートで書かれていますが、その全体を尺八で演奏出来る様に、ピッコロのパートをオクターヴ下げフルートⅠと統合しました。バス・フルートのパートは２本の三尺六寸管（バスD管）という特殊な尺八により演奏をし、曲の冒頭と中間にある汽笛を描写した高音域のDisとCisの音は、短かい尺八の上管のみを使ってこれを再現してみました。
この作品を尺八で演奏する試みは1983年の民音「尺八を10倍楽しむコンサート」に於て尺八ゾリステンにより初演されました。

―――― 休　　憩 ――――

4．百物語より～語りと邦楽器のための夏の夜の怪異譚（委嘱・初演）

吉松　　隆 作曲

語り＝丹羽勝海（客演）

笛＝竹井　誠
尺八Ⅰ＝藤崎重康　尺八Ⅱ＝添川浩史　尺八Ⅲ＝三橋貴風
三味線＝野口美恵子・工藤哲子　琵琶＝田原順子
十三絃箏＝桜井智永　二十絃箏＝吉村七重　十七絃＝宮越圭子
打楽器＝前田文男・臼杵美智代
指揮＝田村拓男

古来より「百物語」というのがある。月の暗い夜、青い紙を貼った百の行燈に灯をともし、青い小袖を着て円座になる。そして、ひとつ怖い話を語ってはひとつ消し、またひとつ語ってはひとつ消してゆくと、すべての灯が消えた時、必ず怪異が起こるという。

この話は、怪異小説集「伽婢子（おとぎぼうこ）」（寛文六年／1666年刊）で紹介されているが、原典は「夜、座して鬼を談じ、怪いたる」あるいは「昏夜に鬼を語ることなかれ、鬼を語れば怪いたる」という諺によるものらしく、陰暦12月、月の暗い夜に前記の作法通り行なうと、まず蛍のような光に包まれ、その後に怪異が始まるという。そこで普通は99以内で話を打ち止めにする。

このモノドラマ「百物語より」は、少々不気味なこの話を元にした邦楽器と語りによる夏の夜のための怪異譚。今夜は、序と間奏曲を挟んで全部で７つの怪異が語られる。それぞれの話は「耳袋」「日本霊異記」「江戸怪談集」などから現代の「学校の怪談」までを参考にして自由に翻案したものである。

*

一、序（…全員）
二、百物語の由来（…尺八）――百物語のそもそもの由来と、実際に行うに当たっての作法。
三、捕えた大なまずの話（…横笛）――相模の国に某という男があった。ある夜ひとりで釣りをしていると大きな手応えがあり、一匹の大ナマズを釣り上げたが…。
四、殺された座頭の話（…琵琶）――山中に住む男が、一夜の宿を借りに来た座頭を金目当てに殺してしまう。そしてその死体は谷底深く捨ててしまうのだが、やがて…。
五、間奏曲（…全員）
六、人牛(くだん)の話（…琴）――昔から、百年に一度ほど、クダンというものが生まれるというが、それは…。
七、猫がものを言った話（…三味線）――ある武家の家では「決して猫を飼うべからず」という家訓がある。不思議に思ったある人が、そのわけを聞いてみると…。
八、屍を食う女に追われた話（…尺八）――隣町から帰る途中の男が、夜ふけに町外れの墓場まで来たところ、墓をあばき屍の骨をかじっている白い服の女を見つけ…。
九、百鬼夜行（…全員）――夜もとっぷりとふけ、百の恐ろしい話を語り終え、百の灯もすべて消えると、部屋は真暗闇になり、そして…。

*

…というような怪談ものを書こうと思い至ったのは、そもそも現代音楽や邦楽器の音楽を聞いて「オバケが出そう！」と言う人が多いからだった。

それなら、いっそのこと目一杯現代音楽風の邦楽を鳴らして、その前で怪談を語れば最高ではなかろうか！…と、ある月の暗い夜、青い行燈の前で思い付き、この奇妙な作品は生まれることになった。

各種の「妖怪図絵」や「怪談集」を読みふけり、「怖い話」と聞けば古典現代を問わず読みあさり、杉浦日向子の「百物語」（全三巻）に影響を受けつつ、構想一年、素材を集めること半年。

作曲は1994年６月、じめじめと暗い梅雨入りの日の夜に完成した。

もっとも、語りの丹羽勝海さんがオドロオドロしい声色で語ってくれて、後ろで邦楽器がそれらしく鳴っていれば作曲家の出る幕はないような気もする。

ただ、怖い話が百並ばないうちに気の早い怪異が会場で起こらないかどうか、それだけは気がかりである。鬼について語れば怪いたるそうなので、怪しい物語や怪しい影にはくれぐれもご用心を。

ところで、あなたの隣に座っている方は、本当に…人ですか？　それとも…。

（吉松　隆）

丹羽勝海（テノール）

東京芸術大学卒業。同大学院修了。1961～65年アメリカ留学。66年「コシ・ファン・トゥッテ」のクリエルモでオペラ界にデビュー。同年、民音コンクール第１位入賞。日本のカウンターテナー第１号として４オクターブにも及ぶ音域とその卓越した歌唱力で高い評価を得ると同時に、オペラのほかにも現代日本声楽曲、さらにはミュージカル、ポピュラーと活動の幅はきわめて広い。

二期会会員、日本大学芸術学部教授。

おしらせ

９月８日㈭　第135回定期演奏会　～アジアへの郷愁～　　津田ホール

７人編成の小アンサンブル「水のバラード」に始まり、韓国「ノリ」、シルクロード「西綾楽」、ガムランの故郷「新実氏新作」、とアジアへの郷愁に満ちた音楽の旅をお楽しみ下さい。

10月６、７、８日　ニューヨークフィルと共演

10月上旬から中旬にかけて第21次海外公演が行なわれます。単独の公演もアメリカ合衆国内数か所で予定されていますが、なんといっても話題の中心になるのは

三木稔「急の曲」／指揮＝クルト・マズア／演奏＝Ｎ.Ｙ.フィル ＆ 日本音楽集団

３回演奏　（公開リハーサルもあり）されます。詳細は次回の定期で.!

11月16日㈬、17日㈭　第136回定期連続演奏会　　津田ホール

～秋の総合定期・創立30周年記念～

二十絃箏

箏

箏を愛するすべての人の繊細な感情を忠実に音に表現するために、楽器の本質を追求した箏

日本音楽集団推薦

琴光堂和樂器店

東京都目黒区碑文谷2-19-15 TEL(3792)8481 FAX(3792)8437